

Title	副詞類の出現位置について
Author(s)	田岡, 育恵
Citation	Osaka Literary Review. 27 P.13-P.24
Issue Date	1988-12-20
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25527
DOI	10.18910/25527
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

副詞類の出現位置について

田 岡 育 恵

0. 従来の統語論では、(1)のように文頭に副詞節が来ている場合、この副詞節は基底で後にあり、それが移動して文頭に出たと考えられて来た。この移動は Adverb Preposing と呼ばれている。

(1) If he feels good, John will go.

しかし、この Adverb Preposing はいつでも適用出来る訳では無い。Geis(1986)は、副詞類が文頭に来られない例をいくつか示し、そこから文頭の副詞類は移動して来たものではなく、基底でその位置に生成されているのだという提案をした。Geisの主張は、副詞類が文頭に来られるかどうかは統語構造だけで決まるのではないという事、そして、副詞類が談話に於いて果たす機能から必ず文頭に来なければならない場合があるという事を考えると、尤もなように思われる。しかし、Adverb Preposing を否定してしまうと、説明のつかない現象が幾つか出て来る。

本稿では、先ず Geis (1986) の議論を検討し、次に副詞類が必ず文頭に来る例を観る。そして、そのような考察を基に統語論に於ける Adverb Preposing について再検討したいと思っている。本稿では、Geis (1986) と同様に副詞、副詞句、副詞節の区別をせず、副詞類として取り扱うが、それでよいかどうかは検討すべきだろう。¹⁾

1. Geis (1986) は、文頭の副詞類は基底で、その位置に生成されるとし、(2)のような規則を提案している。²⁾

(2) Adverb Preposing

Immediate Dominance : S → ADVB [2], S

Linear Precedence : ADVB [2] > S

彼が副詞類の移動を考えないとする一つの理由は、文頭の副詞句は *wh* 移動で動いて来た *wh* 句とは何を修飾するかという点で異なる振舞をするという事にある。

(3) John promised to go at once.

(3) では、*at noon* は *promised* を修飾する場合と *go* を修飾する場合と二通りある。それに相応して、(4) の *at what time* は *promise* にかかる場合と *go* にかかる場合が考えられるが、(5) の文頭の *at noon* は *promised* を修飾するのみで *go* を修飾する事はない。

(4) At what time did John promise to go?

(5) At noon, John promised to go.

しかし、*wh* 移動と同じ振舞をしないから副詞類の移動を認めないというのは、余りにも飛躍がある。*promise(d)* を修飾する可能性については、(4) と (5) で差はなく、*at what time* が *wh* 移動で文頭に出たというのなら *at noon* も同様に移動で文頭に出たといってもよいではないかという事になるだろう。³⁾ (4) と (5) の比較で言えるのは、不定詞にかかる *non-wh* の副詞類は文頭に移動出来ないという事だけである。

しかし、主動詞を修飾する副詞類であっても文頭に来られる場合と来られない場合がある。Geis (1986) は、命題内容が同じで文頭の副詞類を許すかどうかで差のある文を検討した。その際に彼が着眼したのは文の発話行為である。例えば、発話行為が「要求」である文の文頭には時や条件の副詞類は来られるが、場所や様態の副詞類は来られない。

(6) a. On Friday, please phone your mother.

b. If you see Bill, please ask him to phone me.

(7) a. *In Boston, please buy a new car.

b. *In a clever manner, please solve the problem.

(7) の副詞類が(8)のように文末に来れば全く問題はない。

- (8) a. Please buy a new car in Boston.
b. Please solve the problem in a clever manner.

発話行為が「禁止命令」になると、(9)のように時や条件の副詞類も文頭に来られないが、(10)のように発話行為が「警告(脅迫)」の場合は条件の副詞類は来られると言うのである。

- (9) a. ? On Friday, please don't phone your mother.
b. ? If you see Bill, please don't ask him to phone me.
(10) If you don't want to fail this course, don't fail the final exam.

さて、以上の例についての Geis の主張を觀てみよう。先ず、(6a, b) と (7a, b) の違いは、時や条件の副詞類は「要求」を表わす文にとって、要求が満たされるべき時、条件という事で、その文に根本的に関わるものだが、様態の副詞類はそのようなものではないという事から来ているとしている。⁴⁾ (9a, b) のように「禁止命令」の文の文頭に時、条件の副詞類が来られない事については、「禁止命令」は絶対的に無条件に守られるべき事だからと言うのである。

しかし、このような Geis の説明は何も言っていないのと同様だろう。先ず、Geis の言う「発話行為に根本的に関わる」とは、どのような事を意味しているのだろうか。「要求」を表わす文に常に時、条件の明示的な指定が必要なのではなく、(11)のようにそれが欠けていても一向に差障りはない。

- (11) Please buy a new car.

仮に時、条件の副詞類が「要求」の文にとって根本的なものであるとしても、それでは何故、発話行為に根本的に関わるものなら文頭に來られて、そうでなければ文末には來られても文頭には來られないのかという事につ

いて、Geis は全く触れていない。「禁止命令」の文頭に時、条件の副詞類が来られないのは無条件で従うべきものだからだと言っても、それらの副詞が文末に来た場合は(12)のように「禁止命令」の文と共に起出来るのだから、何故、文頭には出現出来ないのかを考える必要があるだろう。

(12) Please don't phone your mother on Friday.

(10) については、Geis は「警告（脅迫）」の文頭には条件の副詞類は来れると言っているのみである。しかし、「禁止命令」と「警告（脅迫）」の区別がどのようにされるのかは示されていないし、(9b)と(10)の違いは寧ろ *if* 節と主節との関わり方の違いにあるのではないかと思われる。*if* 節が意味的に否定の作用域に組み込まれ得るかどうかを考えても、(9b)の *if* 節は「彼に会ったら、私に電話を寄こすよう頼む事は」スルナと、否定の作用域に入れ得るが、(10)では「落第したくなかったら最終試験に失敗する事は」スルナというのは考えられないだろう。*if* 節の主節から独立している度合いが(10)では高いように思われる。

Geis は、命題内容が同じなのに文頭の副詞類を許すかどうかが違う場合を発話行為の違いとした。(7a)のように「要求」の文の文頭に場所の副詞類は来られなかったが、(13)のように「断定」の文では場所の副詞類が文頭に来られるというのである。

(13) In Boston, I bought a new car.

しかし、「断定」の文なら常に場所の副詞類が文頭に来られるかと言えば、そうではない。久野(1978)の挙げる(14)がその例である。

(14) *In New York, John was born

久野は、文頭の副詞句は常に主題的副詞であり、(14)の *in New York* も主題的副詞として働き、この文は「ニューヨークでは how / what」を伝える文の筈なのに、後に来る内容が「ニューヨークではどうしたのか」

を受けて表現されるには不適格なものである為、(14)はおかしな文になっていると言っている。(13)も(14)も発話行為は「断定」という事で同じなのに、文頭に副詞類が来られるかどうかには違いがある。従って、文頭の副詞類の許容は文の発話行為のみに拠るのではない。それには文の命題内容も関係していると言えよう。発話行為が「断定」であって、文頭の副詞句を主題的副詞と解釈して文全体がおかしくない内容である場合に、場所の副詞句は文頭に来られるという事になる。

文頭の副詞類は、続く文の発話行為や命題内容と照らし合わせて許されるかどうか決まるようである。(15a, b)のように動詞の下位範疇化に関わる副詞類が文頭に来られないというのも、*as if*で導かれる節や*in*で導かれる句は文頭に立つ事が出来ないというのではなく、後続の文との関連で文全体が不適格となる為と思われる。

(15) a. *As if I were royalty, they treated me.

b. *In New York Mike lives.

というのは、(13)のように然るべき条件を備えた内容が後に続く場合、*in Boston*は文頭に来られる。また、(16)のように*as if*節に相応すると思われる*as though*節が主節を欠いて単独で現われる事はあり、(15a)でも主節が省略されると、この文はOKになると思われる。

(16) As though Joyce would tell a lot of lies about things like that.

(HP: 67)

(15a, b)のおかしさは、文頭の副詞類に後続する文から来ていると思われる。

尤も、Jackendoff (1972)が挙げているように文末にしか現われる事のない副詞が在る。それは、(17)のような副詞である。

(17) hard, well, more, less, before, early, fast, slow, home, terribly, lengthwise, indoors, downstairs.

これらの副詞では文頭に現われないという事が語彙特性として固まっていると言える。

2. 前章で副詞類が文頭に来られない場合を観たが、本章では逆に副詞類が文頭に来ていなければならない場合を紹介する。

斎藤・鈴木 (1984) は、(18) の *tomorrow*, (19) の *microscopically* は必ず文頭に来なければならないと言っている。

- (18) a. Tomorrow he leaves for Europe in a week.
b. *He leaves for Europe in a week tomorrow.

- (19) a. Microscopically, there was emphysema, fibrosis, and vascular congestion.
b. *There was emphysema, fibrosis and vascular congestion microscopically.

(18)は「明日になれば彼は一週間でヨーロッパに立つ事になる」、(19)は「顕微鏡で見ると云々のものが見つかった」という事で、*tomorrow*, *microscopically* は各々の文の状況設定の役割を担っている。このような副詞類は文頭に来なければならない。同様の例を挙げよう。

- (20) “Why don’t you tell Mother something about the South Seas?”
“There’s nothing to tell. Nothing at all. I’ve forgotten. *When I returned to Japan and got on the train* the rice field looked unbelievably beautiful from the train window. (SS: 59)

イタリックス部の *when* 節が文頭に来ているのには然るべき理由がある。というのは、この文が用いられた脈絡を考えると、話者は「お母さんに何か南方の事を話してあげたら」という依頼に対して、何も話す事は無い、忘れてしまった、寧ろ日本に戻ってから見た水田の美しさを覚えているという意味の応答をしている。つまり、この脈絡では南方の事が話題になっているのだから、*when* 節を先行させて、日本に戻って来た時の話をする

と、一旦断わらないと聞き手は「汽車の窓から見た水田が信じられない位、美しかった」というのは南方の話として、最初は受け取ってしまう事になるからである。

副詞類が文頭に来ると、その意味を踏まえて残りの文は解釈される。これは、(21a, b) の *it* が何を指すのかを考えても領ける。

(21) a. and if there is *one thing that Miss Marple did not like, it was to have confused and contradictory ideas.* (ACM: 192)

b. If a young lady, practicing golf shots, picks up *an old compact of no particular value* in the long grass, surely she doesn't rush straight off to the police with *it*? (WMGS: 105f.)

(21a, b) の各々の *it* が照応しているのは、それぞれのイタリックス部の名詞句という事になるが、実際に *it* が受けているのは、(21a) では「マーブル嬢の嫌いな一つの事」ではなく「もしマーブル嬢の嫌いな事が一つあるとすれば、その事」であり、(21b) でも単に「娘が叢で拾った価値の無い古ぼけたコンパクト」ではなく「娘が叢で拾った価値の無い古ぼけたコンパクト」という事になるだろう。*it* の指示対象には *if* 節全体の解釈が組み込まれると思われる。

このように文頭の副詞類の意味を踏まえて後続の文は解釈される。文の述べる出来事の状況設定となるような副詞類は、当然、先に与えられるべきであり、文頭に出現する事になる。

3. 本章では、副詞類が前に来るか、後に来るかで解釈の異なる例を紹介する。

様態の副詞も (22a, b) のように文頭に来る事がある。

(22) a. And then rather shyly she said, "I — I saw that house there, the one you told me about." (EN: 58)

b. Slowly all the guests left the room.

しかし、様態の副詞が文頭に来る場合と文末に来る場合では意味に違いがある。斎藤・鈴木 (1984) は、(22b) と (23) を較べて、

(23) All the guests left the room slowly.

(23) の文末の *slowly* はお客の一人一人の動きの遅さを表わしているが、(22b) の文頭の *slowly* は出来事全体の遅さを表わしていると言っている。副詞の位置に拠る解釈の違いについて Jackendoff (1972) も (24a, b) に関して次の様に述べている。

(24) a. John dropped his cup of coffee clumsily.

b. Clumsily John dropped his cup of coffee.

(24a) の *clumsily* は *John* のカップの落とし方に対する形容であるが、(24b) の *clumsily* はカップを落とした *John* に対する形容であるというのである。(22a) の *rather shyly* も (24b) と同様に *say* の形容ではなく *she* の形容だろう。つまり、(22a, b) や (24b) のような文頭の様態の副詞が動詞の表わす行為自体を形容する事はない。同じ様態の副詞でも文末か文頭かという位置の違いに拠って働きが違うのである。

Hornstein (1977) に拠れば、(25) のような時の副詞句も文頭か文末かで解釈に差が出るとの事である。

(25) a. At 3 p. m., John had left the store.

b. John had left the store at 3 p. m.

(25a) のように *at 3 p. m.* が文頭にあれば、「ジョンは3時には既に店を出た後であった」という解釈が優先的に取られ、(25b) のように文末に *at 3 p. m.* があれば、「ジョンが店を出たのが3時だった」という解釈が取られる傾向にあると言う。もし、これが正しければ、どちらの意味になるかで *at 3 p. m.* が文頭に来るか、文末に来るかはほぼ決まると言えよう。

以上のような事を考えると、副詞類が文頭に来るか、文末に来るかは文脈に応じて決まって来るものと思われる。

4. さて、これまで、副詞類が文頭に出現する事の出来ない場合、或いは、それとは逆に副詞類が文頭に来なければならない場合を観て来た。そして、副詞類が文頭に来るかどうかは、それぞれの脈絡に於ける情報の呈示の仕方として選び取られているという事を確認した。副詞類が出現する位置は意味的に必然的に決まっていると言ってよいのではないかと思われる。そう思うと、1章では文頭の副詞類がいつ許されないかという議論をしたが、副詞類はそれぞれ何らかの確固たる理由を以てその位置に出現しているのであって、その位置は動かし難いだから、副詞類はいつ移動出来るのかという事ではなく、副詞類は表層のその位置以外に出現する場所は考えられず、初めから基底でその位置にあったとすべきではないかと思う。変形規則 Adverb Preposing は要らないのではないだろうか。Adverb Preposing を考えるという事は、副詞類について表層の位置とは異なる基底での位置を考える事だが、そのような位置を考える根拠が無い。

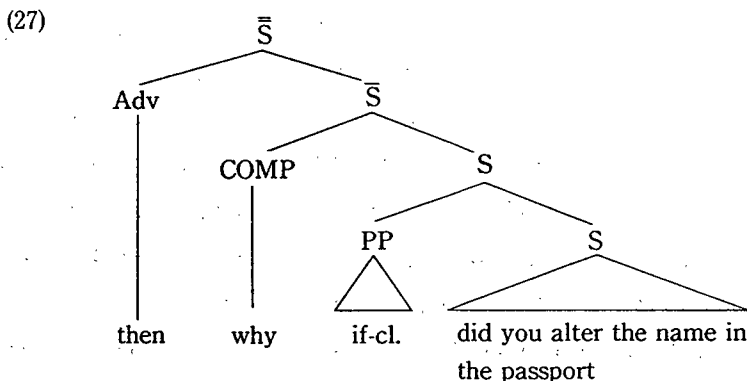
受動変形や与格移動が、現在の統語理論に於いて捨て去られたように Adverb Preposing も捨てるべきではないだろうか。受動変形や与格移動が捨てられたのは、変形の数を減らすという言語習得の理論や普遍文法を目指す統語論全体の動きから来たのであるが、能動態と受動態、或いは、SVOO と SVO Prep O では命題内容は同じであっても話者の視点という点で違う文になるという事も見逃せない。では、副詞類が文頭に来るか、文末に来るかという事でも、副詞類が情報呈示の上で担う役割が異なり違う文になるのだから、文頭に来るか、文末に来るか別々の基底構造を考えてもよいのではないかと思われる。

しかし、副詞類の機能という事からすると、上で述べた様に考えたいのだが、統語理論としては Adverb Preposing を廃すと困る事が出て来る。それを最後に指摘しておこう。

先ず、副詞類は文頭と文末だけでなく、文の中位にも現われる。その場合もその位置に基底生成されたとすべきなのかという事である。(26)は副

詞節が中位に来ている例で、(27) でその構造上の位置を考えてみた。

(26) “Then why, if the handkerchief was not yours, did you alter the name in the passport?” (MOE : 217)



(27) の構造に示された位置に *if* 節が基底であるとすれば、*why* の *wh* 移動の際、二つの *S* を越えてしまう事になり、下接の条件に違反してしまう。にも拘わらず、(26) が非文とならないという事は、*wh* 移動が起こる時点では *if* 節はこの位置になかったという事になるのではないか。

副詞類が表層の位置に基底生成するというのは格理論にとってもまずい事になる。というのは次のような例があるからだ。

- (28) a. We treat *also* secondary cases of the occurrence.
 b. Their class of sentence adverbials is broadly conceived, encompassing *for example* the following expressions.
 c. He pledged *to her* all his wordly goods.

格理論には、格を付与するものと付与されるものは隣接していなければならないという格付与の隣接条件がある。(28) の各例では、格を付与する動詞と格を付与される名詞句の間に副詞類が介在している。にも拘わらず、これらの文が非文とならず、格フィルターを通過している所を見れば、こ

これらの副詞類は格付与の段階では表層のその位置になく、後にそこに移動して来たと考えざるを得ない。

更に、(29) のような場合がある。

(29) Yesterday, I think that John examined her.

Yesterday が意味的にかかるのは埋込文だから、元々は *yesterday* は後にあって、構造的にも埋込文のみにかかっていたと考えられる。⁵⁾

Adverb Preposing を無くす前に、これらの問題に答えなければならぬ。その答はまだ出ていないのだが、一つの可能性としては、(26),(28),(29) のような副詞類は文構造が既に出来上がった後に入って来る挿入句 (節) という特殊な場合として処理するという事が考えられる。それにはどのような副詞類を挿入とみなすかを見極めて行かねばならないだろう。

注

- 1) 例えば、副詞句と副詞節では照応関係の許容に関して差異があり、両者では統語構造で付いている位置が違うのではないと思われる。
 - i) a. *Near John, he found a snake. (Kuno, 1987: 39)
 - b. If John is around, he will do it. (ibid: 31)
- 2) 移動で考えないと言いながら Geis が尚も Adverb Preposing と移動を想わせる用語を用いた事に疑問を覚える。
- 3) (4) の *at what time* は *wh* 句であるが文中の機能からすると (5) の *at noon* と同様に副詞句である。Geis はこの点について触れていない。
- 4) Geis は、時・条件の副詞類と同様に要求を表わす文に根本的に関わると思われる場所の副詞類が文頭に来れない事を疑問に思っている。
- 5) 文頭の副詞類が埋込文を修飾するという事には制限がある。cf. Asakawa (1978).
 - i) a. *Yesterday, John does not say that he kissed her.
 - b. *Yesterday, Mary lisps that John examined her.

参 考 文 献

Asakawa, T. (1978). "Remarks on the Unbound Adverb-Preposing."
Studies in English Linguistics 8, 51-63.

- Geis, M. L. (1986). "Pragmatic Determinants of Adverb Preposing." *CLS* 22. 2, 125-139.
- Hornstein, N. (1977). "Towards a Theory of Tense." *LI* 8. 3, 521-557.
- Jackendoff, R. S. (1972). *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. The MIT Press.
- Kuno, S. (1987). *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. The University of Chicago Press.
- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店, 斎藤武生・鈴木英一 (1984) 『講座・学校英文法の基礎 第3巻 冠詞・形容詞・副詞』 研究社出版

引用文献

- Christie, A., *A Caribbean Mystery*. Pocket Books. (ACM)
- , *Endless Night*. Pocket Books. (EN)
- , *Hallowe'en Party*. Pocket Books. (HP)
- , *Murder on the Orient Express*. Pocket Books. (MOE)
- , *What Mrs. McGillicuddy Saw!* Pocket Books. (WMGS)
- Dazai, O., *The Setting Sun*., translated by Donald Keene. Tuttle. (SS)